

特67

380

長濱神社御縁起

全

014480-000-0

特67-380

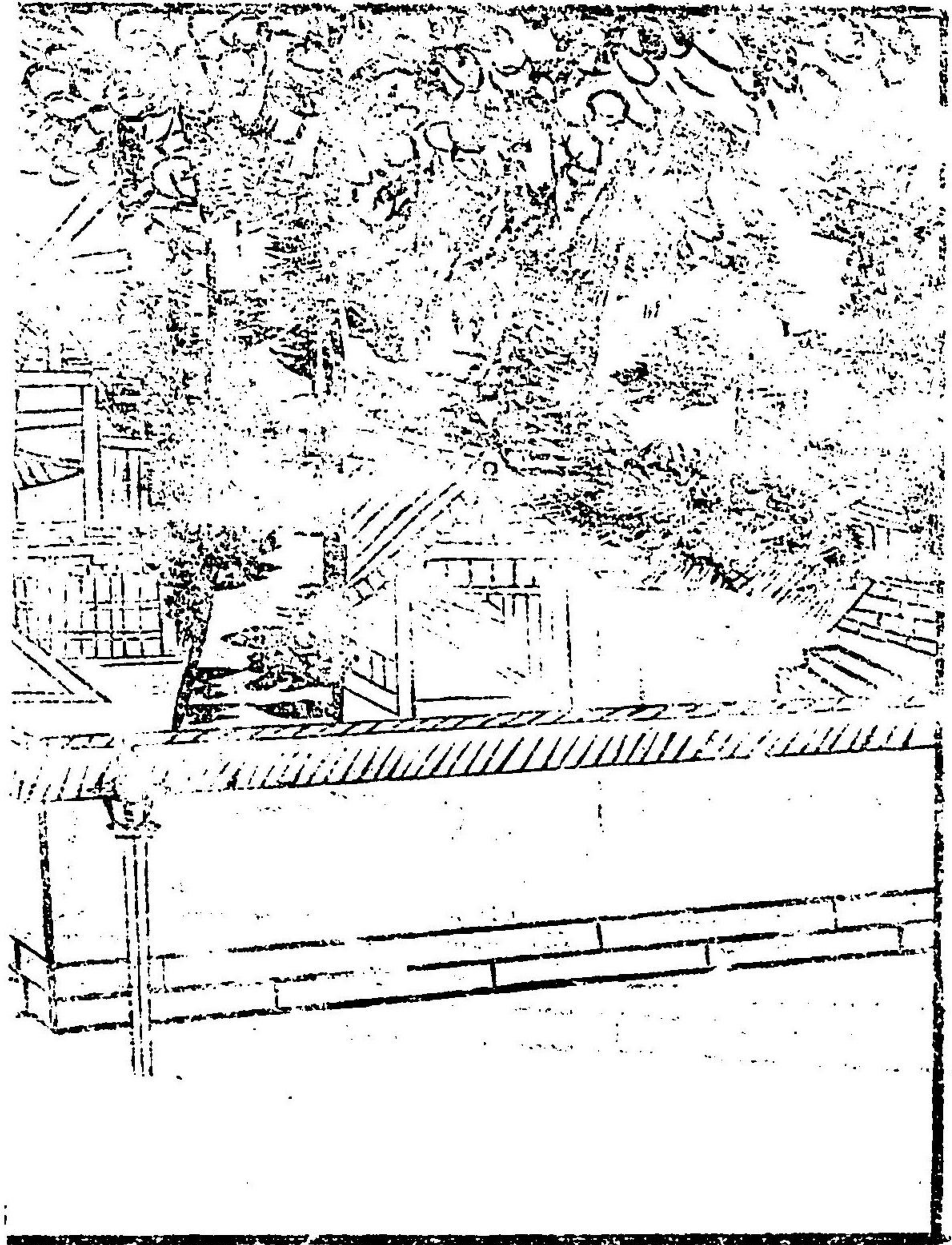
長濱神社御縁起

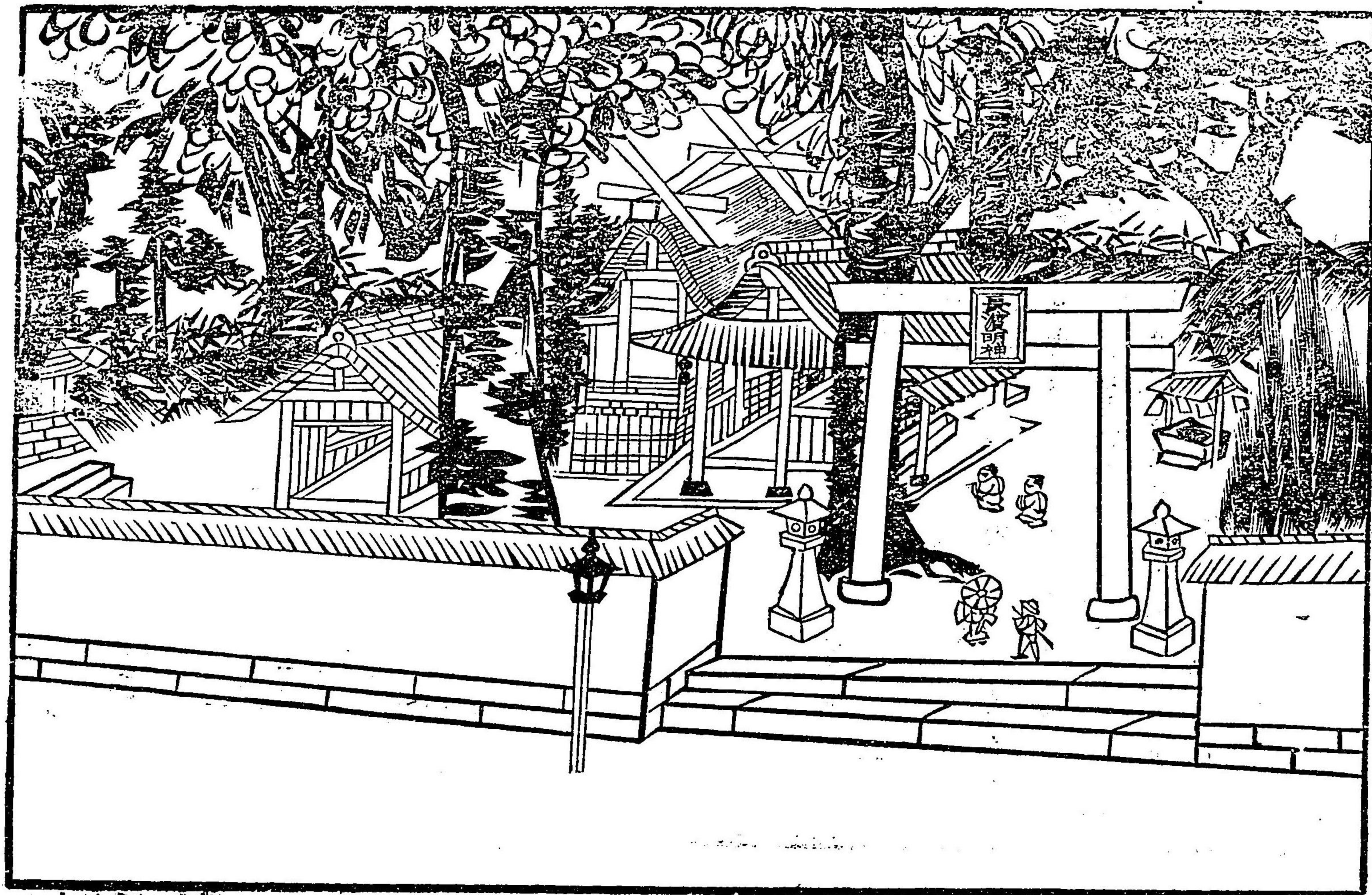
竹田 津多祿 / 著

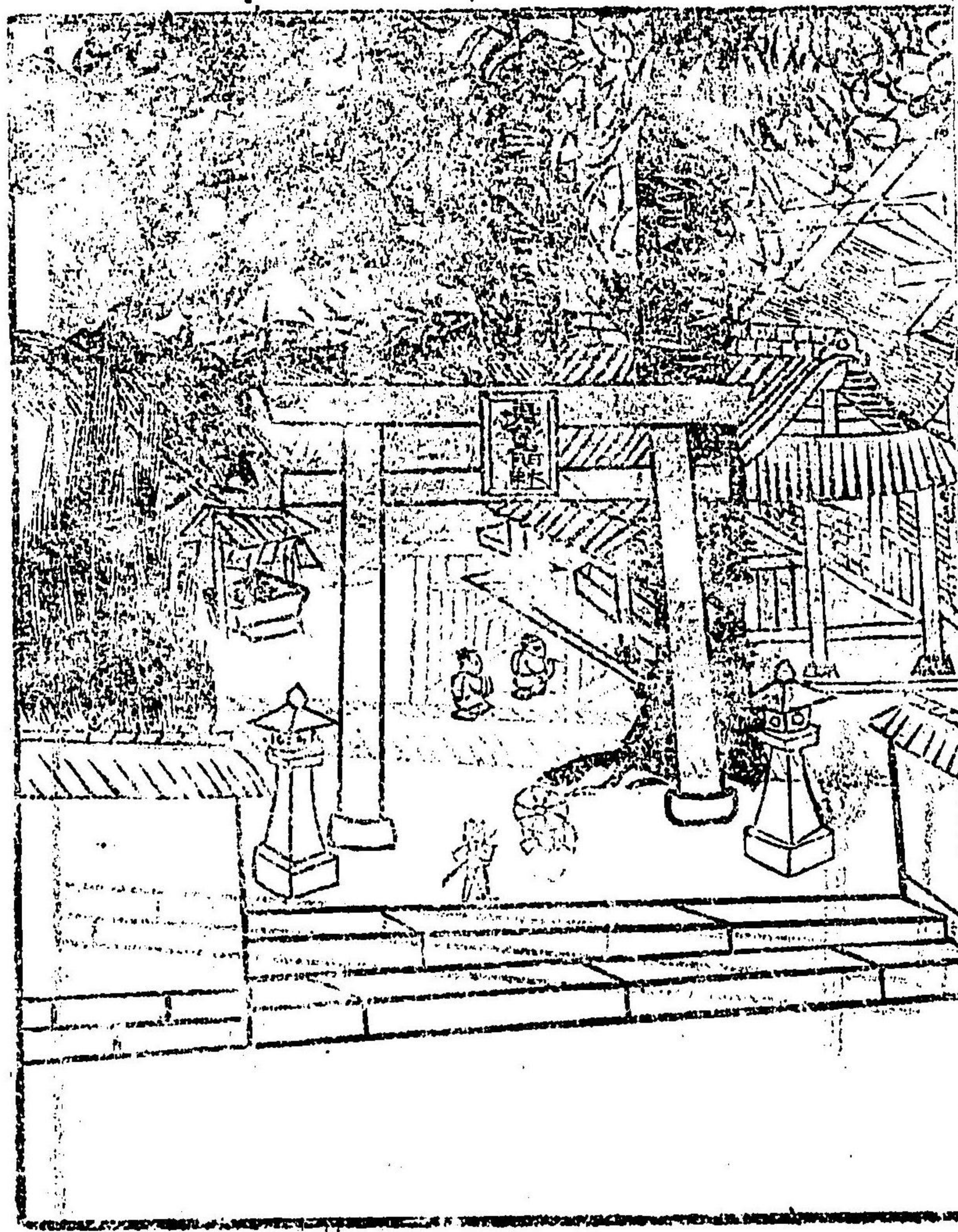
M28

ABB-0858









緒言

大分長瀬神社之殊に靈驗著しく爲に諸人算景の場を地
 方其地を以て神聖の地と稱し其地に神宮ありて是
 又神徳の尊厳を知る人の希なるは遺憾と謂ふべし是
 明治五年七月長瀬神社縁起を草し神徳の一
 端を世上に表示す然るに先の上梓せざるの餘部ありきを
 以て舊編を採り訂正増補し再び信者お分たんと欲す此
 以上梓お際し一言を巻首に付すと云爾

明治二十八年三月八日

竹田津多祿識

長濱神社御縁起目録

- 一 長濱神社沿革の事
- 一 御神徳の事
- 一 本社に離奉納此由來
- 一 神拜の詞
- 一 ミカン餅の由來
- 一 本社所在地より各地の凡里程

●長濱神社御縁起

豊後 竹田津多祿著

長濱神社沿革の事

昔し應永の頃大分町(舊名府内)字蓮丸井所荒蕪某と云ぬものあり家世々農耕を業とせり質性謙厚篤實を以て町中に名あり應永十三年六月廿四日の夜白髮の老翁忽然枕頭に現れ告て曰く余は是れ長濱大神なり今故有て此濱邊に來り望む汝ち若し余を祀らば汝に幸福を與へ子孫をして繁榮ならまめん隨て居民に安寧を得せまむへし毫も疑ぬまど勿れと云ひ終りて消へ失せ玉ふしと思ひまに靈夢覺めり某は直ちに沐浴齋戒し神床に向ひ禮拜し靜坐して東天の白むを待ち翌廿五日夙に海邊を徘徊し居りしに果して木造の小社中に一面の鏡あり裏に銘して長濱大神と有まうは某處喜一方ならず捧持て家お歸り神床に奉じ朝夕祭祀怠

るとなく國家の安寧をも祈れど幾くもあつた時の領主大友親世公に請ひ神殿を建築し其の鏡を以つて神靈となす依て長濱大神と(伊豫國喜多郡長濱村に少彦名命を祀れる社あり長濱村に鎮座坐すを以て長濱大神と稱へ奉るならん又紀伊國名草郡加田浦に鎮座坐す阿波島明神及常陸國大)稱へ奉る以所あり(當時の洗磯前の社に鎮座坐神と御同体なり)社地は舊城內即目今縣廳收稅部と置かれ去邊なりと古老の口碑に傳よれり)然るも慶長元年閏七月地大に震ひ海波高く洪水溢れ小生島沈没(小生島はカンタン鷹の中あり孤島にして風景佳なるものと鱸倉の江の島に伯仲し人戸貳百余ありしと云へり)す爲に沿海の地多く災を受く此時神慶春日浦の渚(春日浦は大分町を去る十余丁に漂流し上れり於是荒卷助右衛門の祖父ある者先づ是を春日神社の境内に夜殿と造營し神靈を遷し奉れり其後元和五年十一月に鹽九升町が貳丁許の東方ある廣く小高き所に神殿を營み此に遷座し奉れり今も當中に宮跡あり字を宮脇

と云へるとそ而して年換り星移り進て周圍に田畑拓け神社の汚穢も綱れ奉るを荒卷助右衛門深く憂ひ延寶九年當時の地を下し殿宇を造營し全年七月遷座し奉れり其後年を経て殿宇破壊し天明年間に再造せしもの又弊類風雨を覆はざるに至り去明治十五年九月目今の宮殿を新に造營せり社地在來の古木は慶長元和以前に移植せざるものあるを想像せり荒卷某の子孫は果して繁榮し今は十余戸あり

本社近傍の小字を鹽九升町と稱へり古昔此地鹽濱にして時の領主に製鹽九升を年貢として上納するの格例なり故に後世鹽九升町と稱ふと古老に聞けり當町二宮某の家に藏する古書中に「古への調をよくに鹽九升 後以清むる長濱の宮」とあり町名の由來を確證するの一例ならん乎

●神徳の事

少彦名命は大己貴命(又大國主命とも稱す)出雲の六社に奉祠

の神なり」と諸共に御心を合せ給ひ御力を協せ紹ひ我大御國
(大日本)を修成去給ひ又青人草の諸々の病に罹り苦み腦めるを
深く神意を煩はせられ醫藥並に禁厭れ方を定先させられ疾を療
治し給へり故に此二柱の大神は吾國醫藥の祖神なり初て後ちに
少彦名神と只御一人に之常世の國と申て海を隔て、遙かに遠
き西の國へ御渡り遊はさき諸々の國々島々を作り堅め給ひ又萬
民を御撫育なされ常陸國那賀郡酒列磯前社に歸り鎮座坐せり此
く御功績の高麗神に坐せば邪の心なく敬ひ奉れば御神徳に因
り如何ある重き病氣と雖も御影を蒙らざるものとありるべし仰き
奉るべし尊ひ奉るべし

人病床お臥去醫藥の驗なく滋養の功なきあり此時お當り禁厭
を施せと病者の精神を虚静ならせめ識らず知らすの中に病氣
の平癒を告ぐるふと有り是れ少彦名命の御神意あり奇なるう
如くなれとも常人眼力の及ぶ所に非らざるなり然るに少名比

古那神は日賣神にまましくて腰下の病を専らお療し給ふり如
く云へり誤れるの甚き事ともなり日古神にまましくて萬民よ
り鳥獸に至るまゝ患ひ腦める種々の病ひお醫藥の功驗を與へ
給ぬは言ぬも更ありざるを田舎に於ては往々禁厭のみ依頼し
て更に醫藥を服膺するを好まざるあり誠に神意を知らざるも
のなり希くと巫を信て醫を信せずの愚痴ある勿き尙神徳の
事は九牛の一毛にも迷危得さきは悉しき事は古事記日本書記
に就き見らるべし

●本社へ雛奉納の由來

本社に祈願有りて參詣する人は社傍の商家おて雛形を購求して
必ず獻納するの慣習なり之に依て拜殿は内外の別なく雛形を釘
付しあり其幾千枚なるを知らず此の由來を尋ぬるお息長帶女命
(神功皇后)三韓を御退治遊はされ御歸國の時御紀伊國名草郡
加田浦の沖合を御通行給ぬとき俄かに御不豫お渡らせられ折

節亦譽田別皇子も御不豫に在らせられ御乳も安く所聞食さるに
そ皇后の宮式内宿禰に此の處に紀伊國の何と云ぬ所なりやと問
ひ給ひけきば加田浦と呼へる所なりと對え奉りき皇后の宮おは
重て問玉わく遙かに向なる社は何れの神を祀れると速に朕に
告げよとありけきと宿禰悉しと知る由もあければ傍の人お問ひ
賀せしに阿波島明神にて即少彦名命を祀れる御社ありと對え
奉れと皇后宮大に歡喜せられ給ひて曰く少彦名命を祀れる社を
らんには朕と皇子の病を祈らんに杯か驗しあらざらむやと皇后
宮御手つから白紙を以て御親らの雛形を裁り給ひ則ち雛形を
てさせ給ひ次に皇子の雛形を作り給ひて則ち皇子の尊体をな
でさせ給ひ而て阿波島明神を祈り給て其雛形を海中に流さ給
ひければ御親子共頓かお平癒遊とさせられたり儲て其時皇后
宮臣下に命玄濱邊お生ひし母子草を摘み採らしめ給ひて勅り玉
わく此草の名を母子と呼ひ朕と皇子か身に能懼へり彼の母子

草を以て餅を製りて阿波島明神に病氣平癒の賽禮として奉らむ
と母子草お餅を製らせ給ひ明神の廣前に奉れり是日三月三
日なり故に後世當日雛を飾り草餅を作ると云へり爰る由來よ
當社にも雛を敷るよと、はなどまものならむの今三月三日母子
草を以て餅を製らす蓬を以て餅を作り祝ふよと、なりまは嵯
峨天皇の御母君此日を以て崩禦ま給ひければ天皇勅し玉わく今
朕か母を失ひ何そ母子と稱する草を以て餅を製するに忍ひむや
と乃之れに代ぬるに蓬を以てせしと云へり

◎神拜詞

掛計卷茂畏支此乃御社爾鎮座坐寸少彦名命乃御前爾慎
美敬比畏美畏美毛白佐久其加苦見腦女留病爾醫藥乃驗志
有良志女給江伊豆乃御靈速幸羽江給江止慎美敬比畏美畏
美毛拜美奉良久止白頰

又
少彦名命乃御前男慎美敬比畏美畏美毛拜美奉良久ト白寸

又
此乃御社仁鎮座坐須長濱乃大神乃御前仁拜美奉都留

◎ミカン餅の由来

御祭日と陰曆六月五日六日十一月五日六日の両度なり夏祭の夜
(六月五日)當社近傍の商家にミカン餅と云ふ名物を賣れり參詣
老たる人にして此ミカン餅を購はされは參詣せざる思をな老
幼に限らず必ず一枝(ミカン餅は常盤木わ木の粉を以て作りた
るものに着色して付したるものなり)を購求して携へざるは奇
老古老曰ふ昔々當所にミカと云ふ寡婦あり斯餅を賣り初め老
より人皆ミカ餅と稱へり ミカンモチと云ふはミカモチのなま
なりと

余嘗て聞く姫ミカ中年所天に後れ一手以て業を勉め貞操以て
世を終ぬと其名今に街頭に賣々たり人を去て感せしむ嗚呼人
慎むへきは行なり今世人情浮薄夫死して墳土未だ乾かず醜聞
既に喧死ものあり何そミカを齧る

大分町より各地の凡里程

- 大分郡鶴崎町貳里○全郡野津原村三里○全郡中戸次村三里
 - 見郡別府村三里○全郡豊岡六里○全郡杵築町拾里○西國東郡
 - 高田町拾四里○東國東郡竹田津村拾八里○北海郡佐賀ノ關七
 - 里○全郡臼杵町八里○南海郡佐伯町拾五里○大野郡市場村○
 - 拾里直入郡竹田町拾壹里○玖珠郡森村拾四里○日田郡豆田村貳
 - 拾里○下毛郡中津町拾八里○宇佐郡南宇佐町拾三里
- 但しの目は遠方參客の参考に供す

明治廿八年三月廿二日印刷
全 年全月廿九日再版

著作兼發行者
大分縣平氏 竹

田津多祿
大分縣大分郡大分町
百九十番地寄留

印刷者
福岡縣平氏 高

瀬直太郎
全縣全郡全町
六百六十九番地寄留

印刷所
大分商況新報活版部
全縣全郡全町

〔定價貳錢〕

